

## 弱い、弱い、弱さをみつけた僕

1

福里ニワを散々に痛めつけた山岸ズム独特の、いわゆる「我抜き研鑽」については『山岸会事件雑感』（昭和三十五年四月五日刊、快適社発行）の中に説明されているので、少々長いが引用してみよう。「毎度の特講や各種の研鑽会等に於いて、お互い話し合える研鑽態度をつけるために、又は各個人の頑固観念を抹殺焼却するために、随分思い切った一応難題に見えるような用語を使うことがある。随分荒々しい語気をわざと使って怒りを誘発し、即座に怒りや頑固観念を焼却することもある。普通常識では到底出来難いことや、やってはならないこと、絶対やれないようなことをやれと強弁することがある。

我執抜きには在来宗教、修養会等で随分思い切ったことをいったり行ったりしているし、絶対服従を強要したりしている。山岸会の研鑽方式では、これが我執抜きだといわないで、思い切った乱暴なような、無茶と思われるようなことをやれるかといったりして、それを出来ないときメつける自己盲信我執をなくするまで、徹底的に強調し、出来ないことだとキメつけるキメつけを取り去って、我を突っぱる頑固を取り去って、お互いに頑固に突っぱり合わないお互いになって、それから話し合いに

入ることになっている。絶対服従でなしに、自分の考えを突っぱり合わないお互いにまずなり合って、それから問題の研鑽に入っていく。

始めから頑固抜きの研鑽だと言えば、どんな難題を持ち出しても、ああそうか我抜き研鑽だからこんな無茶みたいなことを言うんだなあと思って、その心組みでタカをくくってやるから、まるで陰の声を聞いてのクイズをやっているようなもので、種明しを聞いてから手品を見ても何の価値もないように、我抜き研鑽などでは一切前以て我抜き研鑽などということは予告しないのである。効果を考えたくないままである。家が燃えるとか、殺されるとか、死ねとか、死ねますか、一生このままここから帰らずにいられますか、財産を全部放せますか、等々、とても想像もつかないような、ビックリするようなことをまことしやかに強弁する。（「頑固観念焼却研鑽」）

こうすることで、「始めはビックリしたり、或いは怖れるが、研鑽を段々進めていく中に、知らず知らず、自分で気づかぬ中に頑固さが段々に抜けていって、肩も凝らなくなるし、人に嫌われなくなつて、おだやかに話し合いの出来る人になっていくものである」（同上）ということである。

これは「特講」の項で説明した「割り切り研鑽」と同じことであって、精神の日常的状況から抜けでた人間の何物にも囚われない実践性は、即ち人格（人性）としての柔らかさに通ずる。私自身、「特講」の次段階の「研鑽学校」において、係から「このみみずが食べられますか？」と問われて、遂に「食べられます」と答えた時の心境の高ぶりとは、感覚的な広がり（自由さ）は今でも忘れられないものとして脳細胞に焼きついている。それは全く異様な体験で、見えるはずもない学校の裏山の樹々が映像として映ってきたり、イギリスの著名詩人が、草の茎に水が伝わってゆくのがわかるといった感覚を謳った詩が、私にも容易に納得できる感じがしたものである。

ただしこの「我抜き研鑽」あるいは「割り切り研鑽」は、相手の状況の問題があって、やり方と程度によっては、むしろ逆に「我」をつけさせる結果になることは、ニワの受けとりをみてわかることである。「我抜き研鑽」といっても、ニワの場合には本当に裸になったり、小便をかけたりの実践研鑽が伴っていて、そのことでむしろ我（頑固さ）をつけさせていったのである。そのことをみてとった山岸は狂わんばかりに絶望し、一層自己を窮地に陥し入れていった。その挙句のかの熱湯事件であり、山岸会事件であった。

ところで、逮捕状の出る前日春日山を抜けてた山岸であるが、以後自主出頭し及ぶ九カ月余りは潜行していたことになる。この間主として滋賀県を中心に転々と十数軒隠れ家を移っているのであるが、この間の山岸の潜行ぶりたるや真に興味深い。絶えず秘密の工作をしていて、例えば二軒つづきの長屋を借りて、天井からいつでも隣家に逃げだせるように細工したり、押し入れを開けるとリュックがあつて、それをのけると和文タイプライターを置いた、ちゃんとした仕事部屋に行ける抜け穴があつたりした。隠れ家の場所にしても、わざわざ山岸会の問題で被害を受けた会員の家を選んで潜んでいたりにしている。そんな家を当局が疑うわけがあるまい、という計算の上である。

そういう点実に巧妙というか、細心且憶病なのである。それはまさに持ち前の大胆さ、度胸のよさと対照的なものであった。ニワによると、「山岸先生は実に天真爛漫で神経細かく、もつとも人間臭い人間であった。そのいいことにはいい間違えもあれば、聞き間違えもある。泣きべそで、甘えん坊で、短気で、そうかと思うと気の遠くなるほど辛棒強くて、淋しがりやで、おおよそ人間のあるべきものは凡て最極端に備えていた人」である。細心且憶病においても、人に並はずれているところで、やはり山岸のずば抜けた人間性を現わしているといえるのである。

ニワは事件後間もなく警察庁長官と交渉する機会をとりつけ、東京に向いたのであるが、宿屋でふと新聞をみると自分の逮捕状がでている。急転変更して、名古屋のアジトにいったところを逮捕されたのであるが、二週間ほどで釈放、以後事件の後始末のために当局と涉りあつて献身的な努力をつづけた。疲労と腹膜炎が重なつて九月中旬には、一カ月間の入院療養も行つていたのである。

努力の甲斐あつて、山岸に出頭を認めさせることができ、「声明書」を書いて昭和三十五年四月十二日に赴くことになった。出頭といっても事実上は逮捕の形をとつていて、山岸夫婦が大阪のデパートで毛布を買つたり、寝巻を用意したりして、留置場へ入る準備を整えた後、「一服しましょう」ということでデパートの喫茶店へ入つたところへ、三重県警の私服が数人どやどやと入つてきて、連行ということになったのである。

ニワの周辺には絶えず尾行がついていて、隠れ家の山岸に会いにくくにしても、電車を乗り換え乗り換えし、わざわざ遠廻りして出かけていたのであるが、この日はなおさらのことで、買ひものをしている間中二人は私服につけられていたのである。まして山岸の当日の服装は和服に羽織袴、そうり履きの正装であるから、人目に立っていた。

山岸はまず上野署に一週間ほど留置され、その後は旅館からの出頭尋問を受けた。上野から津に移され、ここでも拘置所暮らしは無理ということで、旅館から検察庁に赴いて取調べを受けた。

## 2

春日を出た山岸は、その後二度と山に上ることはなかった。折角つくつたモデル社会になぜ自分自

身は住まう気がなかったのかといえば、それは一つでき上があれば、急速に自らの関心は薄れてゆく彼の飽き性の性格からするものであつたろうが、彼には百万羽よりもより大事な仕事があった。即ちここで山岸会発足当時の彼の発言を思い起こしてほしいのであるが、当初から山岸は二、三年の間に会から身を退きたい旨述べているのである。

二、三年といえは三十年頃であつて、それが特講開設やら百万羽創設やらの忙しきで延び延びになつていたものが、今ようやく潜行を余儀なくされて、かねての企図を果す機会を得たという次第である。かねての企図とは、むろん「正解ヤマガシズム全輯」の完成である。そういうことで山岸は、この会務と切断された特殊な環境に恵まれたことを一旦は喜びはしたものの、肝心の著作の仕事が一向にはかばかしく進まないのである。分量的には口述筆記でかなりの紙数を費したものの、さっぱり思わしい成果が得られない。遂にサジを投げた山岸はその書き散らかしを、反古紙として、出頭する以前に焼却してしまうようにと側近のK女に預けた。

山岸のこの潜行中の状況であるが、いくつかの事情はあれ、つまるところニワと切り離されているところからくるもので、隠れ家にあつて山岸はひたすらにニワ恋しとうめき苦しむのだが、それは直ちにこれまでの自分の仕打ちの反省となつた。その恋情と不安と反省の念は、ニワに宛てた数十本の恋文や談話（ノート）によつて知られるのであり、その深刻さは悲痛極まるものである。その一部を抄録すれば――

「怒・憎・悩・苦・悲等ないのが本当だといつて、自分もそう思つていたのに、柔和（ニワ、巳代蔵の願望をこめた宛字か筆者）との結婚から大変なことになる、胸掻きむしり、頭をぶつける苦悩に苛なまれ、死よりも幾層倍つらい連続だった自分は、二重三重の苦しみで、一番の受難者と思えた。

そしてそれを逃れる術は、死か高野山か刑務所かと、何回思つたか、覚悟したか、それさえ許されな  
い会・会社・全人に縛られた自分だと思ひ込んでいた」

「やはり全人であり、柔和である。柔和子に対してはY子とまた違った部分がある。苦しめ通して報いる何物もなかつた。そして何回か死を実行した。柔和子も自若としていた。神々しいくらい落ちついていた」

「エライことをやってきたものだ。僕は今までこの批難は勿論、批評や人から聞いたままのことを他にいっただけで人を傷つけ、殺すといつて警告して繰り返していいつづけてきた僕が、ウカツなことに肝腎の妻の悪評のたつような吹聴をしてきたことだつたね。これを書くとき一部の人は、またママにいかれていると冷評するかも知らんが、そんなこと問題じゃない。本当にすまないではすまされんバカな、ヒドイことをしてきたものだ」

「どんな無理難題いわれても一緒に居てさえくれたらそれでよい。気まま放題いってもらいたい。そしてせめて曲りなりにも出版の方で申し訳、気づまきして（気棲を合わせて筆者）欲しい。文章に  
はずみが見つからない、味も香も出ない。たまに調子がでたと思つても、淋しさを紛らす空景気の自分で嫌になる。駄じゃれくらい。

シャンと落ちつけばいくらでも立派なものが、泉のように湧いて出るし、早々進捗するのだが、今の  
のような後の世に残して、この上に恥をかきたくない。柔和子が死ぬる日、たとえ病氣（病氣ではな  
い無理死だ、自殺だ、一回の私心だ、死ななくてよいのに、わざわざ求めての逃避だ）で死んでも、その日は  
僕にも私心を一回だけ許してもらおう。全人に公約しておく。本当のウツつきか、最後に証明される」  
「別居から起る不安、苦しめてやりきれない。助けて、とにかく理屈抜きで助けて下さい、と絶叫す

る。見えない、話しあえない不安、一体どうしたらよいのか」

山岸はこれらの手紙文を筆記者の前で、文字通り声涙下る中に、時には一日がかりで口述しているのである。隠れ家が馬小屋かわら小屋の時もあって、山岸は小さなランプを手元においてペンを走らせ、そのペンがわらくずの中にまぎれ込んで、わらの中をまきぐつてやつと探しあて、引きつづき切なる思いを書きつづつていたこともある。しかも要心深い山岸は、筆跡をくらすために手紙文を、何人もの手を変え、人づてに送り届けている。そして日が経つにつれてやや冷静さを取り戻すと、自己への客観的な判断も下せるようになってきた。

「人にはいろいろ見えるが、弱い弱い弱さを発見した僕。淋しがり、幼稚さ、やさしきにおいて世界一の僕が見えるでしょうね。同格の柔和ちゃんには」

「きめつけがあった、僕にも。研鑽、無痛革命をいいながら、押しつけ、嫌いにする、剛研鑽をしてきた。どうせ革命だ、一度は痛い目もしなければならん、男女の交りでも初めは云々と、愛情感を失ったものは云々と、それを真の理智と温かい、柔らかい愛情に立脚した近代的方法を研鑽すれば、必ずみんな仲よく、楽しい、痛い目一つもせないで、全人仲よく楽しい、一体の革命が行なわれると知っているものを、どうも大変な、自分で考案し、人にいいながら、昔の下手な、成功率の低い、マインスの多い、剛研鑽を捨てきれなかったわけである」(三五・三・二七)

「みんなが僕の盲信に気がつかず、先方も目隠ししているから当然だし、またケタも違うから無理ないが、アノ時アノ場で柔和子に会わなかったなれば(ドコカで必ず会っただろうが、そしてアノ時アノ場でなかったら、こんな大層かけなかつたらうに)僕は永久に妻でない人に盲従されて、高座にアグラをかいて、目隠しもとられず、自分も見えず、公器を逆運転して、自他全人を破滅の淵に落し込んだこと

だろう」(三五・三・二)

「生れながらの人並外れた知恵と度胸とキップと押しと、どんな束縛難関も奇妙に脱け出す、不思議な魔力、能力、怪力、必ず打ち破ってまかり通る。ヌラリクラーと体をかわして、空を切らして、相手を参らせ、したがわす話術、妖術、どんな巨弾を打ち込まれても、それに勝る幾層倍かの絶対力で打ち返すなど、硬軟自由自在の超人間。これでは何物も歯がたたない筈、よい気になって益々独走はいよいよ加速度でバク進し、力を増し、もはや自分でも止め度のない、怖ろしい段階へ突き込み、アワヤ世界も、自分もコッパミジンと打ち砕かれるところだった。イヤ、打ち砕かれた姿を、悪魔、悪鬼となつて、ニタリとアザわらつていたところだった」(三五・二・二八)

「もうあんな下手な、歩止りの悪い、もはや無用になった、共に苦しみ、二人も世界もまたメチャクチャにする、我執抜き剛研鑽は、一切捨てられたと思う。絶対に出してはならない、出さないことを、出しようのないことを膽に銘じることができた」(三五・二・二八)

「他の人に対し高い位置を感じさす態度で、他を脱皮させようと強引に押しつける。自分で親切だときめつけて、他を嫌がらせ、責め苦しめる我執から脱皮すること。他の人をよくしよう、脱皮させよなど一切廃業、一生やめよう」(三五・二・二四)

「私の正体は、強そうなことをいっても、弱いこと、この下なしです。柔和と同じで、本心は柔なので、焦りが出たり、追い詰められると、内面が弱い証拠に、柄でもない、見せかけの剛を出す、最後には剛では成りたたし得ない自分を発見します」

「潜行中会員に宛てた手紙の中でも、卒直に「私の態度を截る」(鈍愚生)として、私の過去は心の世界が肝心で、深底にある心が真のものであるなれば、たとえ一時は誤解されようとも、自分に恥じない真心は必ず通ずるとして、嫌われ憎まれたままで死んでも悔なしとしてやって来まして、言動、現象、態度を軽視し、失敗の数々を積んで来ました。その後、この事についてしばしば反省し、矢張りこういうゆき方(荒っぽい我抜き研鑽=筆者)は、効果も大きいですが、弊害が永く残る事実を見て大分態度の方も改め、改めるように心がけて来ましたが、未だ未だ——でした」と反省している。遂にさすがの山岸も、シャッポをぬいだわけである。山岸流のいい方を借りれば(謝る何もものもないが、自己の重大な死角をみつけた)ことになる。それは何かといえ、実に単純なことでも自己自身への過信、盲信であり、いつの間にか、自分の肉体にもアカが付着してきたことに気がついたのである。

もともと自己反省するべく山岸は、余りにも衆に抜きんでていた。自身でも書いているように口八丁手八丁、いかなる境遇でもすると抜けできることができたり、相手も気づかぬ裡に人格転換を企てることのできるといった、まるで魔術師並の才能と自信を持っていたので、そうした能力自体の自己に及ぼす影響といったものを、勘定に入れることができなかつた。また常識人の想像を絶した思考、構想において、それに同等に対応する能力者がいない以上、いくら研鑽の要を説いても、同一地平に立って研鑽に取組める相手がいない。(あるいは自己以上の師家がいない)

ただしこれまでも妻のニワのみは、山岸に対して、人にはいうが自身がまだできていないことの指摘はしてきた。しかしこれとても、山岸得意の分割専攻思考法、「ぼくの問題はぼくの問題であって別問題、今はあなたの問題なんやから、まずそれを解決しよう」という論理で絶えず棚上げにし、結局は自己を治外法権の場に置いてきた。そうした盲目的な自己過信において、無茶な剛我抜きが行われてきたことに、今ようやくのことに気がついたのである。

今までも耳にしてきたはずのことが、やっと心に聞けるようになった。それはニワと切り離されての、隔離同様の身の上になって初めてもたらされたことではあるが、もとを質せばニワが与えてくれた機縁ではある。山岸はここで改めてニワの存在を意識した。

恋情とは別にニワの評価に関しては、手紙で次のように書いている。

「これを最も巧妙に好転さし、全人を幸せにするたった一つの方術は、柔和も即座に棄になり、病氣も昂進せず、漸次奇蹟的に治り、僕が二番目に救われ、全人も皆幸せになれる。世界中の人を笑み、慈しむ、世界のママが誕生すると思った。言ってもきた。これはその通りだと今でも思っている。そしてそうなる柔和子だということに間違いのないと思う考えは、我執を放し、何回調べても僕にはそう出てくる。間違っているだろうか。

柔和さえ、それきめつけと違うかねといわしてくれて、エッそうかしらと素直に聞いて、共に我執の正体、みんながあれだけの人がなぜあれに気づこうとしないのだろうか、不思議がっている、簡単に判る筈の我執について調べてくれたら、判れば持ちつづけられない柔和でもあるし、柔和さえ、柔和さえを連発してきた」

「世界のママ」とはまたオーヴァナなどというのはこちらの勝手な思いであって、とにかく本人が真実そ

のように思っていたことは認める必要がある。しかも文中にあるように、「僕は二番目に救われ」るのであって、第一に救われて欲しいのはニワであり、ニワさえ救われれば全世界が救われるのである。そのことの確認を、いや確認以上に実現間近であることを、自己盲信に気づいた山岸が告知しているわけである。

「如何に苦しみの中でも立直り、零位にたてる素晴らしき。きめつけは恐しいね。随分苦しめたね。お互いに苦しかったね。永かったね。極刑に処せられたキリスト、十字架にかけられた柔和が、輝く無辺の愛のプラナーを放射しながら、降誕の日、間近かだ」

そんな大事なニワを自分以外の他の小人物にとられてはならじと、山岸はニワに対して愛の無固定を説きながら、外に出歩く時は婆や同道しろの、男と握手してはならないの、口をきいてもいけないの様々な制限を課し、たとえ研鑽会の席でも他の男の傍らには坐らせようとしないのである。

それはとりもなおさず自分の位を信ずる余りのことであって、山岸は自己の盲信に気づいたとはいえ、そのことで一層自分の不動の本性と卓抜な智慧を正信しつつあった。

山岸はしきりと「どうしても死ねないものがある」を口にしていたが、それはもともと肉体はわがものにしてわがものに非ず、社会の公器である以上、自殺という私心において勝手に使用してはならないとする考えに基づくものであるが、それよりもやはり自分が天によって与えられた、特殊の能力者であることの自覚があった故のことである。山岸は心中、他にかけがえのない自己自身への予感と怖れを抱いていた。

「僕は柔和子を世界の女王と思ひ、僕はそれに匹敵する真なる夫とは思っている」(三五・三・一)

「私の言動の奥の奥は、誰にも解し難いことを、一番よく知っていてくれるのは柔和だね。柔和にさ

え、容易に判らない深いものだということ」

「私が今死んだならば、色々の思想、観念の上にとった、本当の研鑽、一体社会の実現に大変な時間がかかる。その間に人類が、それら我観念のために斗争等をつづけ、苦しみ、滅亡の日を吾と吾と心から招くかもしれない」

「ちょっと観点を変えればこんなものか、次々と浮んでくる英知が、どうして僕のような者一人に与えられたことかと思えるが、どうしても自分の智慧ではない。絶対に僕の力ではないと断言できませぬ」

談話(ノート)でもいっている。

「私は、言ったことばは、書いた文字は、世界に何かの形で影響し、後世永遠に取り消すことができなと思う覚悟の前に立って声を大にして叫ぶ、全人幸福以外に何ら生きる望みを持たない。……考えること、思うこと、言うことは人間としての僕には間違いないと断言する自信はないが、全人幸福を願う心につゆ毛頭のいつわりはない」

一方これら極度に昂ぶったことばを目にしてのニワの方であるが、事件の交渉で忙しいのか、文面の余りの悲痛感に却って実感が湧かないのか、それに見合う応対をしていない。胸中にはまだまだ「これくらいのこと泣かされてたまるか」の気持があった。心理的には妙なもので、自分が先に無我執人になることは損するような感じがあって「あなたこそ先にどうぞ」と、なおしばらくの全人一体か、絶対愛かの時間があったのである。

取調べが一段落してからの山岸は、そのまま津に留まって、小高い山の上の「三眺荘」なる瀟洒な一軒家を借りて住まうようになった。例によって親しい側近者ともどもの生活である。山岸とすれば何れ冷暖房装置のついた家に住まって、そこを「柔和の里」と名づけ、親しみが一杯の、小さな家族的協同体の中で仕事をつづけたのであったのである。

潜行中から津時代にかけての文章はいくつかあるが、特徴的であるのは、初期の「特講資料」にあるような戯文調のスタイルが消えて、文章的な緊張感が増していることである。この文体の変りようによって、山岸自身の精神状況も推し計られようというものである。即ち山岸は昔も今も本気は本気でいる。しかし以前の本気と今の本気は質が違っていて、今は以前の斜に構えたユーモアの余裕が背後に引っ込み、ぐっと生真面目になっている。

精神構造的には、ニワへの愛情が媒介となつて、次第に二重自我から統一自我的人間像に移りつつあった、ということができるのかもしれない。出頭の折に、潜行中に書いた文章を全部反古とするのみならず、これまで書いたものの凡てを焼き捨てたいとした気持ちはわかる気がする。以前の戯画的な本気から本気の本気に移り、精神境界が次元的に変化してきているのであるから。

しかし津の十カ月余りの、久方振りの安穏な生活においても、彼の念願の著作の仕事は捗どることがなかった。義務的には毎月の山岸会事件の裁判のことがあり、主を失った山からは毎日誰かが山岸の指示を受けにやってくる。とても気忙しくて、じつくり室に閉じこもってられないのである。そ

うでなくとも事件以降の運動の沈滞を、引き上げるための手当てをせねばならない。考えれば考えるで、彼の持ち前の構想力は活発に働き、次々に新しい策が湧いてくるのであった。

この津時代の山岸の活動については、今日殆ど知られていないが、色んな催しを計画しては実行に移しているのである。

それは主として、大いに誤解を受けた山岸会の真相を知ってもらうための努力であつて、外部向けに「ヤマギシズム政治専門研鑽会」「世論科学研究所」「ヤマギシズム研究者グループ」「ヤマギシズム生活研究、山岸会式養鶏研究後援会」や社会党（和歌山県連）、全国農鶏連合会主催の養鶏講習会等を提案し、開催している。これら研究会に参加した学者の中には、東京工大水津彦雄、川喜田二郎、原芳男、北海道学芸大草刈善造、宗教学者高木宏夫、哲学者三浦つとむらの名前がみえる。

要路者にも積極的に働きかけ、内閣総理大臣池田勇人、大韓民国代表部、アメリカ大使館、アイゼンハワー大統領、フルシチョフ首相及びソ連大使館、一説には皇太子にまで親書を送っている。このうちソ連大使館への働きかけは成功して、四月二十五日、ヴ・プロホロフ三等書記官ら一行が春日を調査に訪れた。時恰も安保の年である。会員の一部は積極的に反安保運動に参加し、山岸は反安保勢力の中でも「声なき声の会」に関心を抱いていたようである。

しかしこれら戦術的手段とは別に、山岸は大きな戦略的方策を練っていた。今度は日本はおろか、世界が眼の玉とび出るような奴でかい奴であるというが、例によってその具体策は述べていない。ただ方策のあることだけは和歌山県六川での談話で、

「今度とにかく目の覚めるような奴を一発やろうや。世界中の見とれる奴を」  
「けど、やすやすと出さないことね。何でもない方法や」

「今度の方法もタダではいえないな。一件十万くらいでとつたら本気になるの」

等々と語っている。事件以前にも山岸はニワに対して、「無数の具現方式がある、使い方如何によつては世界中を動乱に追ひ込む奇想天外の、しかも簡単な方策も多々あるから、ウカツに人に聞かせられない。ニワ子こそと思ったのは僕の過信だったろうか」と述べていたのである。事件後においては絶対剛方針はやめたのであるから、安全な柔方策なのであるが、これもまたして、まず少数の本気でやる気のあるものだけで始めようとしていた。

結局この「世界が目の覚めるような奴」とは、どういうことであつたのか不明のままであるが、他人の剛我抜きを諷めた山岸は、今度は何かで触発されるや、道であろうがどこであろうが奇行を演じてニワを困らせている。

二人は道を、手をつないで仲良く歩いている。誰の眼にも、羨ましい夫婦のごとくみえる。それがちょっとしたこと、ガラリと雰囲気が変わってしまったのである。それがたとえ雨上がりの時にでもそうで、何かピリッがあると途端に山岸はあば卸しの浴衣着て、あば卸しの帯をしめたまま、水たまりの中に寝転んでバシャバシャやってみせたりする。それをみてニワは「また始まった。知るもんか」と思っている間はダメ、本人は絶対にやめない。

そこへ自転車を通る、馬車を通る。そんな人たちが立ち止まってみても平気である。ニワが知らん顔していると、何時までも暴れているのである。しまいにニワもたまりかねて、そこへ一緒に坐り込み「私も遊ぼう。損する。私一人だけこんなこと立っていて……」と着物も何もあらばこそ、山岸と同じように泥水の溜りでバシャバシャやったりしていた。

こういうことは以前にもしばしばあつた。山岸会事件で騒がれている最中もそうで、家の前で大工

が仕事をしていた。手伝いの人数もいた。その時またしてピリッがあつて、山岸は「もういい」と出てゆきかかった。ところが平生は禪をつけていない山岸が、出てゆくのにわざわざ着物の前をぐいと広げて、男性自身を丸出しのまま外へ出てゆこうとする。外では人が働いているし、そこへ胸をはだけて出てゆかれるのでは適わんから、あわててニワが通せんぼをし、ニワが折れた態度をみせる。

「わかったか？」

「わかりました」

それでも「俺はだまされんぞ、だまされんぞ」といつている中に、急に顔が痙攣し始め、やがて「お、これ以上はがまんできん。カンニン、カンニン」とニワを抱いたまま、今度は踊り始めたりするのである。童児がタダをこねているのと、同じであつた。

そうかと思うと、田んぼの畦を歩いていて、水に飛び込んだりする。「よう飛び込まんだろうというてみい」といっても決していつてはならない。本当に飛び込むからである。一度それでこりたことがある。田圃の脇に溝があつて、肥料を含んだ水が流れていた。それをニワが「汚ない」というと、「ぼくは汚くない」という。その挙句に、

「この水よう飲むか」

「私はよう飲まない」

「ぼくはよう飲むと思うか」

「まさか」

といったところ、やにわにじゃばじゃばと水の中へ飛び込んでいって、砂漠のなかでオアシスをみつけたごとく、その水を両掌ですくつてごくごく飲み始めた。ニワはそれをみて「わかったあ」と思

わず叫んだ。山岸というのは、そういう男だったのである。

5

複数婚の問題にもどると、実のところ潜伏中に、ニワへせせと悲痛なるラブ・レターを送っている間中、山岸は身の廻りの世話をする女性たちと愛の交渉を交しているのである。むろんニワに知れては大変と、ニワが訪れるときは慌てて相手の女性を前日に帰したりしている。他の女性との同衾の最中にもニワへの恋情は激しく動く。女を数多く知れば知るほど、むしろニワの他の女にない稀少価値がわかるといったふうであった。

ある女性とは同じ褥にありながら、やおら懐からニワの写真を出してみせて、「可愛ゆうて、可愛ゆうてならん」と写真をなでさすったり、ほほずりしたりする。それをみて相手の女性はたまらず、室を飛び出していった。

このように山岸は、女にはまるでだらしがなかった。そのだらしなきの加減において、今後他の女性に手を出さないことを誓った山岸に、義子の美和子が「もしママと離れて、本当にそうならんといえますか」と問うと、「いや自信はない。ただそういうことにならんよう機会を回避する以外ない」と正直に告白せざるを得ない態のものであった。

山岸は旅先で他と同宿することがあっても、「男と寝るのはいやや」といつていた。要するに彼の感覚と情緒の波長が女性と一番あうということであったのだらうと思う。取材して歩いてても女性に対する方が、男性に対するよりも余程感情や真実を吐露したい方をしている場合が多いと感じた。つ

まり山岸は外面的には男であれ、内面的には女なのである。

山岸ズムでは「男は優柔不断、女はいさぎよく」といういい方をするが、その意味するところは男は思考、女は決心を強調したものであろう。いい変えれば男は女らしく、女は男らしく……ともなる。「若鶏は老鶏のごとく、老鶏は若鶏のごとく」ともいう。山岸は女らしくある以前に、本性的に女性的なフィリングを身につけた人であり、その如実の女らしさに大抵の女性が、異性を感じるよりも同性を感覚する中で吸い寄せられていったものらしい。

ただし重要なことは感覚と情緒の面で女性である山岸であればこそ「愛児に樂園を」と児童に対する愛情のことばを述べ、「天寿に近くなるほど幸せが得られる」と老人に対する慈しみのことばを吐くことができたことである。総じていえば、弱者に対する共感ということにならうか。少年の日飽かずピヨピヨと走り廻る雛を眺めていた山岸は長じて、人間的には童児・老人・不具者・浮浪者を憐み、職業的には百姓を救わんと思ひ、性的にはこよなく女性を愛したということになる。

しかも女性的同化力の強さにおいて、花と交わり、鶏と睦みあうこともできた。宇宙万物への感情投射が、容易に可能なのである。

複数婚を望んでいた当のY子は如何になったかといえば、これもやはり事件の当年ぐらひは隠れ家に同棲していた。しかし十二月頃ニワが訪れるとあって一旦山岸の傍を離れ、その後は殆ど相逢うことがなかった。Y子のみならず、出頭以降の山岸は他のどの女性とも接触することはなかったようである。以前のどんな親しい女性ともニワを介してでなければ、逢おうとしない。たまに出あって、向うが握手を求めてきても、後ろにすきって相手の手もよう握らないというようになった。

だがそうなることによってY子への愛情は消えたわけではないし、複数婚の理を曲げたわけでもな

い。ただ理は正しくとも、ニワという限りは不可能であることを悟ったのである。ニワは他の何ものにも代えがたい以上、ニワが承知せねばやはり現実の複数婚は諦めるより致し方ないのである。

ある日またして複数論議が始まって、ニワが「それならば複数婚を認めましょう。ただしあなたが複数なら私も複数でゆきますよ。それも二人や三人ではなく、五人、六人とつくります。それでいいですか。大体あなたは性的には私一人もようお守りできないくせに、私がその方で本気になったらどうしますか？」と切り出したところが、山岸は「そんな複数婚ならやめた」とあっさり兜を脱いだ。

山岸がこんな単純なことで兜をぬいだのは面白いとしても、理想社会は空想社会ではなく、真実に基づく理想社会なるが故に必ず成ると信じていた山岸は、真実開かれた理想社会においては、本当に性の全面開放は可能だと考えていたのである。(注)しかし現実には春日で行なわれている性の在り方を耳にして、いよいよ性問題の難しきを感じていたものようである。

なぜなら山岸なき後、山ではムシヨ婦りの連中によって、山岸がつくづく反省しているというのに盛んに「剛我抜き研鑽」が行われていたのである。その我抜きも、女性の場合は性とからんでくる。例えば研鑽相手の女性に「俺とキスしろ」と迫る。いやだといえれば、「夫とならでるものが何で俺とできんのや」とさらに迫る。「俺を夫と思やええやろ」というわけである。結局、最後は女が負けると「あっ、やれた、やれた」となる。

できないとする観念の切り換えで、容易に夫以外の男ともキスできるようになる。しかしキス程度ならまだよかった。中には豪傑がいて、夫のいる女にでも肉体を迫る。二人並べておいて研鑽が始まり、女の方には、「夫となら寝られるのに何で俺と寝られない」「誰のものでもない、無所有であるのに、何で夫だけ所有している」「夫以外の男とできんのやったら、我執やないか」等々とでけるまで

迫られると、どんな女でも落ちてしまう。理に弱いのは男であるよりも、むしろ女であった。

「そんなことするくらいなら私なら舌噛み切ってしまう」などといっているような女でも、研鑽の拳句は夫の前で係の男と結ばれてしまうのである。そしてそれでこそ性にこだわらない無我執人ということになり、夫は夫で、それを何の嫉妬心もなく眺めていることができれば、やはり無我執人ということになる。そんな剛我抜きが行われることで、山の性は急速に解き放たれつつあったのである。

このような山の成行きをみて、山岸は「そんなことやないんや」と非常に心配していた。元ほといえ自分の蒔いた種であるにしろ、その種に明らかに毒花がつき始めたことを感じとっていたのである。そして何れ何らかの手を打たねばならぬ、としていた。

もちろんそのように考えるについては、ニワの如何にしても厳しい性問題の態度からくるものがある。三十五年も年末にかかると、性問題について、夫婦同一の方針において考えを固めていたものようである。ということは、結婚の年の十一月の愛研、翌年の熱湯事件、山岸会事件と引続く中で、急速に変わりつつあった山岸に対して、さすが頑強のニワも夫の側に寄り始めたということである。

(注) 極楽思想の前身となった、インドのウツタラクルという理想郷では男女の情交は全く自由である。一夫一婦制はない。情欲のおもむくままに関係して、生れた子供は草の上に寝かしておくと、色んな人がどこかちともなくやってきて、乳をのませたりして、子供は自然に育ってゆく。